



TITLE:

現代世界経済における社会主義的
国際分業(上) - 1965年ポーランド貿
易統計の加工・整理・分析を通じ
て -

AUTHOR(S):

田中, 宏

CITATION:

田中, 宏. 現代世界経済における社会主義的国際分業(上) - 1965年ポーランド貿易統計の加工・整理・分析を通じて -. 経済論叢 1981, 127(2-3): 226-250

ISSUE DATE:

1981-02

URL:

<https://doi.org/10.14989/133860>

RIGHT:

經濟論叢

第127卷 第2・3号

大正期ソーダ業界と日本曹達の成立……………	下 谷 政 弘	1
マルゼルブと出版統制(3)……………	木 崎 喜 代 治	32
企業組織における雇用……………	成 生 達 彦	50
マックス・ウェーバーにおける 理解社会学の形成……………	奥 田 隆 男	68
現代世界経済における 社会主義的国際分業(上)……………	田 中 宏	86
産業革命期フランスにおける 労働者の貧困問題……………	清 水 克 洋	111

昭和56年2・3月

京都大學經濟學會

現代世界経済における 社会主義的国際分業（上）

1965年ポーランド貿易統計の加工・整理・分析を通じて――

田 中 宏

目 次

はじめに

- I ポーランドの外国貿易の概観
- II ポーランドの部門別・地域別貿易構造
- III ポーランドの燃料・鉱物原料・金属部門
の貿易構造（以上、本稿）
- IV ポーランドの植物性・動物性原料・食品
部門の貿易構造（以下、次稿）
- V 機械・設備部門における国際分業の展開
 - (1) 品目別・地域別輸入構成
 - (2) 品目別・地域別輸出構成
 - (3) 社会主義的国家間分業の展開

まとめにかえて

は じ め に

一国社会主義的発想から解放されて、世界的な枠組みのなかで現代社会主義を実証的に把握することは今日の課題である。社会主義をめぐる近年の諸事件はこのことを焦眉なものとしている。

統計の加工・整理・分析に限定した本稿の課題は、ポーランドの貿易構造の分析を通じて、世界経済の諸関連の中での CMEA 加盟国の国際分業の実態を解明することにある。ここで析出されえた国際分業とポーランド貿易の特徴を、この種の研究にともなう繁雑さを軽減し、全体を鳥瞰できるように前もって提

示しておこう。それは以下の諸点に要約することができる。

1. ポーランド貿易は1946年から70年まで安定した増勢傾向にあり、輸入で25倍輸出で28倍伸びている。また、60年代を通じては両者は約2倍強の増加をみせている。貿易収支の面からみれば、貿易取引総額の60%を独占する対 CMEA 加盟国貿易と20～30%弱を占めている対先進資本主義国貿易の赤字基調と対後進国（他の社会主義国と他の資本主義国）貿易の黒字基調の下で、全体として構造的な入超を特徴としている。また60年代は部門別輸出入構成の点からは、安定したものになっている。（第1節）

2. ポーランドの部門別・地域別貿易構造は貿易収支の赤字、低位な加工部門の比重の高さ、CMEA 域内取引高の比重の高さ、を特徴としており、2環節・4小環節の基本構造を形成している。対社会主義国貿易では機械・設備、原燃料・金属の輸出入の構成比が高いことの上に、機械・設備、工業消費財の輸出、原燃料・金属、動植物性原料・食品の輸入という関係ができており、対資本主義国貿易では動植物性原料・食品が主要部分を構成し、その上に機械・設備、化学製品・建材等の輸入と原燃料・金属、消費物資の輸出というパターンをとっている。ここには、社会主義工業化の相互促進・援助をにやう社会主義国貿易の基礎のうえに、自国の工業の一層の発展のための技術的基盤の一部を資本主義国から導入している姿が浮きぼりにされており、社会主義体制と資本主義体制の経済発展水準の格差のもとでの社会主義貿易と東西貿易との対抗と絡み合いが表現されている。

3. 対資本主義国貿易は途上国と先進国とでは異なった様相を呈している。対途上国貿易は動植物性原料・食品の輸入と機械・設備、消費物資の輸出を特徴としており、それが途上国と社会主義国との隔絶した発展水準を象徴している。対先進国貿易のうち、先進7ヶ国との貿易は機械・設備、燃料・鉱物・金属、化学製品・建材等の一方的入超と農産物原料・食品の圧倒的な出超を構造としている。このように対先進7ヶ国貿易がその先進性とポーランドの後進性を鋭角的に表現しているのにたいして、ポーランドに近接するその他の資本主義国

を仕向地とする貿易はポーランドの経済と工業の水準の劣位を前提としながらも、釣合のとれた各部門構成比と収支バランスを特徴としている。

4. 対社会主義国貿易の一部を構成している CMEA 以外の社会主義国との貿易はその割合も少なく、対途上国型と対工業国型の中間的なものである。CMEA 域内貿易は加盟国の社会主義工業化と並行した機械・設備、重工業用燃料・原料の相互輸出入型であるが、機械・設備の構成比の高さは相手加盟国の経済発展水準の序列と対応関係にある。このような特徴の CMEA 域内貿易は、ソ連から燃料・鉱物・金属を輸入して、機械・設備、消費物資をソ連に輸出するという、ソ連を中核に放射状に組織された国際分業と、ソ連以外の加盟国との機械・設備の輸出と輸入の両比重の高さにあらわれているように、工業化を相互に保障する上で重要な生産財生産部門内での水平的な国際分業によってなりたっている。このような二つの型の国際分業は資本主義的なそれとは異なり、相互に工業化を進行させながら国際分業を発展させていく方向性は社会主義的な性格のものであると言える。(以上第Ⅱ節)

5. 燃料・鉱物原料・金属部門の貿易は品目別の国際分業の特徴ある展開が検出されず、各国別の資源賦存状態にもとづく自然的分業とそのうえに推進された自立的工業化にともなうものである。この部門では CMEA 域内での自給自足体制が成立しており、その供給国＝ソ連への依存関係が強い。全体としては資源輸入国であるポーランドは石炭によって輸出国としての重要な側面をあたえられているが、このことが他の鉱物・金属、石油、並びに他部門の生産物を CMEA 加盟国だけでなく先進資本主義国からも輸入することを可能にしている。(第Ⅲ節)

ここでポーランドに対象を限定したことは第Ⅰに、現在の CMEA 加盟国の貿易統計に関して、ソ連に続いてポーランドのそれが最も詳細であること、第2に、ソ連およびチェコスロバキアについては一定の分析結果が出されていること¹⁾、第3に、ポーランドは対西側との交易借款関係が発展していること、

1) 杉本昭七「貿易からみた CMEA の国際分業構造」平田重明編「コメコン＝CMEA体制の展

およびそれが70年代に展開した東西経済関係の緊密化を考察する上での素材を与えてくれること²⁾、第4に、総合プログラムに象徴される70年代経済統合路線の強力な推進主張国であったこと³⁾、などによっている。

なお検討する時期は、時系列変化としては1946年から70年まで、構造分析としては1965年に限定されている。後者の限定は資料の制約というきわめて技術的なものためである⁴⁾。

I ポーランドの外国貿易の概観

本稿の課題であるポーランドの貿易構造の実態的分析に着手する前に、この節ではその外国貿易を概観する。

第1表はポーランドの貿易取引総額、輸出入額およびその収支を表わしたものである。そのうち輸出入だけは第1図にグラフ化されている。ここから析出される特徴は第1に、若干の例外を除いて貿易と輸出入が安定した増加傾向にあることである。貿易総額及び輸入額、輸出額は1946年から65年まで16.7倍、16倍、17.6倍、70年までは26.3倍、24.7倍、28倍にそれぞれ急増しており、60年代のあいだだけでも2.3倍、2.1倍、2.4倍の伸びを示している。この増加傾向は第1図の輸出入のグラフの上昇線が如実に物語っているが、それはポーランドの工業化と経済発展の達成の反映であり、そこにおける安定性は資本主義諸国の外国貿易の特徴ときわだって異なるものである、と考えられる。なお、若干の例外とは、1952年、53年度と57、58年度である。前者については、対資本主義国貿易でしかも輸入のうちに低下があらわれており、朝鮮戦争に端を発する東西間の緊張激化がヨーロッパにも波及している時期であり、後者は1956年

開」1976年所収。

2) 近年、コメコン諸国の対西側借款は問題となっているが、70年代末までのポーランドのそれは173億ドルに達していると算定されている。「日本経済新聞」昭和55年2月17日。この点については詳しくは拙稿「ポーランドの貿易構造と経済危機」世界経済評論1980年11月号参照。

3) Michael Kasar, *Comecon, Integration Problems of the Planned Economies*, Oxford University Press, 1967, p. 108.

4) ここで利用したポーランド外国貿易統計集は1969年以降貨幣タムの表示が部分的に欠落している。それゆえ現在第一次資料として使用できるのは1965、66、67、68年のみである。

第1表 ポーランドの貿易取引総額および収支

(単位 百万ズロチ)

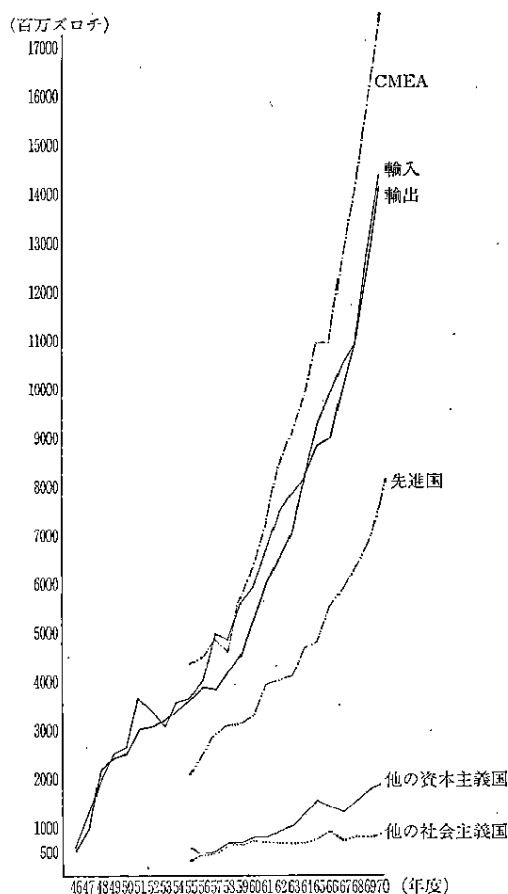
	総 額	輸 入	輸 出	収 支
1946	1089.3	583.1	506.2	- 76.9
47	2265.6	1280.6	985.0	-295.6
48	4190.7	2065.6	2125.1	+ 59.5
49	5005.1	2529.8	2475.3	- 54.5
50	5209.6	2672.6	2537.0	-135.6
51	6743.2	3696.6	3046.6	-650.0
52	6553.6	3451.9	3101.7	-350.2
53	6420.9	3097.0	3323.9	+226.9
54	7089.0	3613.8	3475.2	-138.6
55	7405.9	3727.2	3678.7	- 48.5
56	8026.4	4087.4	3939.0	-148.4
57	8906.0	5006.1	3899.9	-1106.2
58	9144.8	4907.3	4237.5	-669.8
59	10258.9	5678.4	4580.5	-1097.9
60	11282.0	5979.9	5302.1	-677.8
61	12761.1	6746.8	6014.3	-732.5
62	14126.1	7541.6	6584.5	-957.1
63	14996.2	7916.1	7080.1	-836.0
64	16674.7	8289.0	8385.7	+ 96.7
65	18272.6	9361.2	8911.4	-449.8
66	19064.6	9976.2	9088.4	-887.8
67	20685.3	10579.1	10106.2	-472.9
68	22843.6	11412.4	11431.2	+ 18.8
69	25404.7	12838.6	12566.1	-272.5
70	28620.6	14430.1	14190.5	-239.6

出所 ROCZNIK STATYSTYCZNY HANDLU
ZAGRANICZNEGO 1971 より作成。

のいわゆるボズナン暴動と指導部の交代、ハンガリー事件という東欧の政治的激動期に合致している。

更に貿易収支に目を転じるならば、若干の例外（1948年、53年、64年、68年）を除いてほぼ赤字基調であると言わなければならない。しかもその入超額の幅が貿易総額に対してかなりの比重（1957年の12%、59年の10.7%等）を占

第1図 ポーランドの貿易動向



出所 第1表に同じ。

めていることおよび1947年から70年までの累積赤字額が98億9600万ズロチになり、1970年貿易総額の約35%にも達していることから、入超は構造的である、と考えられる。これが第2の特徴である。

第2表は、続いて、対CMEA加盟国、対その他の社会主義国、対先進資本主義国、対その他の資本主義国の4つの地域別の貿易の構成比率をあらわしたものである。

その特徴の第1は1960年以降各構成比が比較的安定していることである。その中でCMEA以外の社会主義国との輸出入の比率が60年代後半以降、微減傾向にあり、それに対応して対CMEA加盟国のそれが微増の状態にある。これ

第2表 ポーランド貿易の地域別構成
比の動向 (単位%)

	CMEA	他の社会 主義国	先進国	他の資本 主義国
1950	58.4	0.7	37.7	3.2
55	59.3	4.6	28.5	7.6
56	56.7	6.0	31.9	5.4
57	55.1	5.8	33.5	5.6
58	50.8	7.6	34.4	7.2
59	56.3	6.3	31.0	6.4
60	56.6	6.5	29.8	7.1
61	57.0	5.5	31.2	6.3
62	60.0	4.6	28.8	6.6
63	61.1	4.2	27.8	6.9
64	59.6	4.1	28.4	7.9
65	60.5	4.2	26.6	8.7
66	58.1	4.9	29.4	7.6
67	61.1	3.6	28.7	6.6
68	61.4	3.7	28.1	6.8
69	62.4	3.4	27.3	6.9
70	63.2	3.0	27.1	6.7

出所 第1表に同じ。

にたいして、対先進資本主義国貿易は28%~30%、対その他の資本主義国貿易は6~8%の範囲をほぼ微動しているにすぎない。第2に対先進資本主義国貿易の比重は、50年代後半に比べて60年代は若干後退しているとはいえ、30%弱という高い比率を占めている。それはポーランド貿易の特徴を規定する、欠くことのできない重要な要因であることを意味している。第1図で対CMEA貿易総額と並んで、対先進国貿易総額のグラフが輸出入のグラフと平行して上昇していることがこの点を物語っている。このことが第2の特徴である。

次に、このような特徴をもつ輸出・輸入を総括する収支の特徴を明らかにしよう。第3表がそれである。収支における最大の特徴はその赤字基調であり、黒字の年度(48年, 53年, 64年, 68年)のその幅も小さいことを考えあわせると、ポーランド貿易の逆調は構造的である、といえる。この点はすでに述べていたことである。更に赤字基調を地域別にみると、対CMEA加盟国および対

第3表 地域別貿易収支

(単位 百万ズロチ)

	合 計	対社会主義	対CMEA	対他の社会主義	対資本主義	対先進国	対途上国
1946	— 76.9	— 153.4			76.4		
47	— 295.6	— 6.1			— 289.5		
48	59.5	— 42.0			101.5		
49	— 54.5	45.4			— 99.9		
50	— 135.6	— 189.9	— 206.1	16.2	54.3	52.7	1.6
51	— 650.0	— 403.4			— 246.6		
52	— 350.2	— 309.4			— 40.8		
53	226.9	51.8			175.1		
54	— 138.6	— 158.2			19.6		
55	— 48.5	— 106.4	— 134.9	28.5	57.9	131.4	— 73.5
56	— 148.4	— 388.9	— 500.0	111.1	240.5	175.7	64.8
57	— 1106.2	— 800.0	— 827.8	27.4	— 305.8	— 281.9	— 23.9
58	— 669.8	— 375.8	— 570.0	194.2	— 294.0	— 422.7	— 128.7
59	— 1097.9	— 964.2	— 913.1	— 51.1	— 133.7	— 137.4	3.7
60	— 667.8	— 477.1	— 560.3	83.2	— 200.7	— 193.0	— 7.7
61	— 732.5	— 460.2	— 434.3	— 25.9	— 272.3	— 371.5	— 99.2
62	— 957.1	— 847.5	— 784.4	— 63.1	— 109.6	— 159.0	— 49.4
63	— 836.0	— 811.7	— 774.3	— 37.4	— 24.3	— 62.5	38.2
64	96.7	177.9	144.0	33.9	— 81.2	— 114.6	33.4
65	— 449.8	— 555.3	— 495.2	— 59.9	105.5	261.9	— 156.4
66	— 887.8	— 814.8	— 923.1	108.3	— 73.0	— 65.6	— 7.4
67	— 472.9	— 502.7	— 617.1	114.4	29.8	— 126.6	156.4
68	18.8	162.0	47.9	114.1	— 143.2	— 175.8	32.6
69	— 272.5	— 198.2	— 296.9	98.7	— 74.3	— 203.9	129.6
70	— 239.6	— 828.3	— 900.3	72.0	588.7	306.4	282.3

出所 第1表に同じ。

先進資本主義国の貿易が入超の基礎をなしている。その場合、対CMEA入超幅は対先進国のそれを大きく上回っているが、後者の幅については抑制作用が働いているということをうかがわせる。対その他の社会主義国および対その他の資本主義国との貿易収支は若干の例外年度はあるにせよ、出超をすう勢としていることが留意されよう。

第4表 部門別輸出入構成比

	輸 入 (%)				輸 出 (%)				
	機 械	原燃料	農産物	消費財	機 械	原燃料	(石炭・コークス)	農産物	消費財
1946	14.0	42.0	35.0	9.0	0	88.9	73.1	1.9	9.1
47	17.8	59.9	18.2	4.1	1.0	71.0	57.6	12.8	15.3
48	18.5	61.0	15.5	5.0	0.6	70.5	51.7	16.0	12.9
49	24.4	62.5	10.3	2.7	2.4	64.5	47.8	20.6	12.5
50	32.4	53.1	11.2	3.3	7.8	56.0	40.4	24.1	12.1
51	33.9	53.9	8.9	4.3	6.8	67.8	46.8	16.6	8.8
52	36.6	48.3	11.8	3.3	10.2	62.2	44.0	18.6	9.0
53	41.5	49.1	6.7	2.7	12.3	57.8	38.0	20.3	9.6
54	32.5	50.6	13.5	3.4	11.1	61.6	44.6	18.0	9.3
55	30.9	51.7	13.0	4.3	13.1	64.4	46.6	15.3	7.2
56	33.2	48.6	12.1	6.0	15.6	63.8	43.2	11.7	8.9
57	23.8	53.1	17.4	5.7	20.0	61.0	39.3	12.6	6.4
58	26.7	54.0	11.0	8.4	26.8	50.8	28.9	16.9	5.5
59	27.5	48.5	16.9	7.0	26.3	49.0	24.9	18.2	6.5
60	27.1	51.5	16.0	5.4	28.0	43.8	21.7	18.1	10.1
61	29.1	49.7	15.3	5.9	28.0	39.0	18.7	21.4	11.5
62	33.2	48.8	13.3	6.6	30.0	39.0	17.2	19.2	11.7
63	34.1	44.5	15.1	6.3	33.1	38.0	16.1	16.0	12.9
64	30.6	48.7	15.3	5.4	33.4	35.5	15.2	18.7	12.4
65	32.8	47.3	13.2	6.7	34.4	35.2	14.9	18.1	12.3
66	35.1	47.2	11.5	6.2	35.3	34.3	14.6	16.6	13.9
67	37.0	46.5	10.9	5.6	36.1	33.0	13.5	15.5	15.4
68	35.9	47.2	11.3	5.7	37.0	33.1	12.5	14.1	15.9
69	36.8	47.0	10.4	5.7	39.1	33.0	11.5	12.1	15.7
70	36.4	47.8	9.6	6.2	38.5	32.7	11.5	13.1	15.6

出所 第1表に同じ。

最後に、機械・設備、燃料・原料（ただし輸出の場合のみ、石炭・コークスの内訳を表示）、農業生産物、工業消費物資の4部門構成による輸出入構成比を第4表に示しておく。

ここからは多くの点が指摘できるが、次の特徴だけを述べておこう。

第1に輸入は輸出に比較して構成が安定的である。輸出では、戦後の経済復

興・再建と50年代の急速な工業化を担った原燃料、とりわけ石炭・コークス輸出が50年代末以降急激に比重を落としており、反対に機械・設備の比重が、少し遅れて工業消費財の比重が伸びてきている。農産物は輸入の場合と同様に独自の傾向のないことが留意されよう。

第2に、しかしながら、60年代は輸出入ともに構成が安定しており、機械・設備はほぼ同じ輸出入比率を保持し、原燃料は輸入が、農産物、消費財は輸出が高い比重をなしている。

II ポーランドの部門別・地域別貿易構造

これまでポーランドの貿易を時系列的に概観してきたが、この節では、その構造を部門別・地域別に概括することを課題としている。

第5表はポーランドの部門別・体制別貿易構造を表わしたもので、ここから次の諸点が特徴づけられよう⁵⁾。

第1の特徴は、6億3100万ズロチにものぼる貿易収支の赤字である。すでに第1表で明らかなように、ポーランドの貿易収支は40年代末から70年にかけてほぼ構造的な赤字基調である。ところが、先の第1表の同年赤字額は約4億5000万ズロチであり、累積計による赤字6億3100万ズロチの約71%（世界貿易統計の赤字5億8000万ズロチの約78%）にすぎず、残りの約30%の赤字額は統計上不明である。

ところで、1965年の貿易収支の赤字の基本的要因は、燃料・鉱物原料・金属（以下Ⅱと略記）の1億4400万ズロチと化学製品・肥料・ゴム・建設資材（Ⅲ）の3億1500万ズロチ、植物性・動物性原料・食品（Ⅳ）の6億ズロチの大幅な入超であるが、消費物資（Ⅴ）の4億1800万ズロチの輸出超過によってはそれ

5) この表に続く本稿での5部門分類はコモン外国貿易統一商品分類にもとづき再集計したものである。両者の関係は以下のとおりである。Ⅰ機械および設備（1——機械および設備）、Ⅱ燃料・鉱物原料・金属（2——燃料、鉱物原料、金属）、Ⅲ化学製品・肥料・ゴム・建設資材（3——化学製品、肥料、4——建設材料および組立部品）、Ⅳ植物性・動物性原材料・食品（5——植物性・動物性原材料、6——生きている動物〔屠殺用動物を除く〕、7——食品原料、8——食品）、Ⅴ消費物資（9——消費物資〔工業製品のもの〕）

第5表 部門別・体制別輸出入構成

(単位 百万ズロチ)

		資本主義 %	社会主義 %	果 計※1 %	総 計※2 %
I 機械及び設備	Im	431 15	1643 32	2074 26	2092 25
	Ex	271 -160 9	1813 170 40	2084 10 28	2116 24 27
II 燃料・鉱物原料・金属	Im	482 17	1778 34	2260 28	2308 28
	Ex	588 106 20	1527 -251 34	2116 -144 28	2151 -157 28
III 化学製品・肥料・ゴム・建設資材	Im	373 13	331 6	704 9	743 9
	Ex	196 177 7	193 -138 4	389 -315 5	423 -320 5
IV 植物性・動物性原料及び食品	Im	1574 54	898 17	2473 30	2546 31
	Ex	1583 9 53	290 -608 6	1873 -600 25	1978 568 26
V 消費物資	Im	57 2	547 11	604 7	611 7
	Ex	365 308 12	658 111 15	1022 418 14	1051 440 14
VI 総計	Im	2917 (36)	5198 (64)	8115 100	8300 100
	Ex	3004 87 (40)	4481 -717 (60)	7484 -631 100	7720 -580 100

() の比率は体制別構成比を示す。なお他の比率は部門別構成比である。

※1 ※2 総計とは品目別の表示による小計を合計したものであり、この品目別小計の国別内訳を示す数値を合計したものが累計である。それゆえ累計の方が総計よりも小額である。

出所: ROCZNIK STATYSTYCZNY HANDLU ZAGRANICZNEGO, 1966 より計算。

は十分に償われていない。機械・設備 (I) は出超が1000万ズロチにすぎず、入超額を減少させる要因にはなりえていない。

第2の特徴は、部門別構成において、燃料や原料および加工度の低位な部門が貿易の主要部分を占めていることである。II と IV の比率はそれぞれ28% (Im), 28% (Ex) と30% (Im), 25% (Ex) で、全体の半分以上を占めている。とはいえ、若干の出超を示している I も26% (Im), 28% (Ex) の比重を占めており、この点は原燃料・低加工型の特徴の中では、留意されなければならない。

以上のような全般的な特徴を1965年のポーランド貿易構造はもっているが、対社会主義国貿易と対資本主義国貿易とは異なった様相となっている。これが特徴の第3である。

表によると対社会主義国貿易は I と V が出超、II と III, IV が入超であるのに、対資本主義国貿易では II, IV, V が出超、I, III が入超であるというパターン

をとっている。収支のプラス・マイナスの視点からすれば、Ⅴの出超とⅢの入超は両体制に共通するものであるから、対社会主義国貿易と対資本主義国貿易との相違は、資本主義にたいして入超で社会主義にたいして出超のⅠと、反対に資本主義にたいして出超で社会主義にたいして入超のⅡ、Ⅳとの対照的な関係のうちにあらわれているといえる。

ところで、この相違点は更に輸出入の部門別比率を検討すれば、一層明快になる。対社会主義国輸出入の比重では、Ⅰの32%（Im）、40%（Ex）、Ⅱの34%（Im）、34%（Ex）の数値が示すように、工業化にともなう機械・設備と燃料・鉱物・金属の貿易が主要部門を構成している。これに加えて、Ⅳの輸入が17%、Ⅴの輸出が15%であることから、明らかに動植物性原料・食品などに代表される原材料、低加工製品の輸入、機械・設備に代表される工業製品の輸出を構造とする特徴が析出される。これにたいして、対資本主義国貿易では、Ⅳが中心部分（54%（Im）、53%（Ex））を形成しており、ここでは自然的要因を多く含む分業にもとづく相互補完的關係が成立していると思われる。ところが、輸出が優位な部門はⅡ、Ⅴであり、反対に輸入が優位なそれはⅠ、Ⅲであることから、上記の特徴のなかにあって、機械・設備、化学・建設資材等の工業製品を輸入し、原材料を輸出する構成をとっていることが留意されよう。

このような体制別・部門別構成から、次のような第4の特徴が浮かびあがってくる。つまり、機械・設備並びに工業用原燃料の相互輸出入による社会主義工業化の相互促進、援助の機能を、社会主義諸国向けのポーランド貿易ははたしながら、その基礎の上に、資本主義諸国からは、機械・設備や化学製品等の入超を原燃料および消費物資の出超で部分的に補償することによって、白国の工業化の技術的基盤の一部を導入しようとしている。

以上4つの特徴は、資本主義体制と社会主義体制との経済・工業発展水準の格差、世界市場では輸出競争力を十分にもちえていないが社会主義体制では比較的競争力のある工業をもつポーランドの位置、そしてこれらの要因に規定された形での社会主義国貿易と東西貿易との対抗と絡み合いが、現代の世界経済

の枠組みの基底にあることを物語っている。しかもそのなかで、Ⅰの機械・設備、Ⅱの燃料・鉱物原料・金属、Ⅳの動植物性原料・食品は両体制間の対抗と絡み合い、錯綜した国際経済関係を集約しており、ポーランド貿易構造の基本的な骨組みを与えているように思われる。

次に、第5表で析出した貿易構造の全般的な特徴を仔細に解明するために、仕向地を資本主義国とする貿易に限定して分析を試みよう。

第6表はその部門別・地域別の輸出入構成を示したものである。抽象度の高

第6表 対資本主義国貿易の部門別・地域別輸出入構成

(単位 百万ズロチ)

		先進諸国	%	(7ヶ国)*1%	(他の西 欧諸国)	%	途上国	%
Ⅰ 機械及び設備	Im	430	21	278	23	152	19	1
	Ex	70	3	43	3	27	3	201
Ⅱ 燃料・鉱物原料・金属	Im	419	21	249	21	170	21	63
	Ex	508	21	142	9	366	40	113
Ⅲ 化学製品・肥料・ゴム・建設資材	Im	298	15	237	20	61	8	74
	Ex	151	6	75	5	76	9	46
Ⅳ 植物性・動物性原料及び食品	Im	801	40	390	33	411	51	773
	Ex	1450	60	1155	74	295	35	133
Ⅴ 消費物資	Im	55	3	36	3	19	2	1
	Ex	221	9	141	9	80	9	144
Ⅵ 総計	Im	2003	(69)	1190	(41)	813	(28)	913
	Ex	2400	(80)	1557	(52)	843	(28)	636

※1 先進7ヶ国とはアメリカ、イギリス、西独、フランス、イタリア、カナダ、日本をさしている。()の内の比率は地域別構成比を示す、なお他の比率は部門別構成比である。

出所 第5表と同じ。

い資料加工から、低いそれへの移行は、これまで分析した構造的特徴の背後に隠されている重要な特徴を明るみに出すだろう。それは以下のものである。

第1. 資本主義体制は、ポーランドに対して先進的な立場に位置していることが、第5表では明らかになったが、第6表によれば、開発途上国と先進国とは全く異なった様相を呈している。

というのは、途上国との貿易取引総額が先進国とのその約5分の1にすぎ

ないために、先進国との貿易構造の特徴のうちに埋没してしまっているがため、対途上国貿易は、むしろ対社会主義国貿易に特徴が近似していることがわかる。すなわち、Ⅱの出超は異なるが、Ⅰ、Ⅴの出超とⅢ、Ⅳの大幅入超、それによる貿易収支の赤字がそれである。しかしながら、同時に私達はそこに相違をみないわけにはいかない。Ⅰの機械・設備の輸出額2億1000万ズロチとⅤの工業製品消費物資の輸出額1億4400万ズロチとにたいする微々たる輸入額に集中的に表現されているように、社会主義国貿易に比較して、機械・設備、工業製品の対ポーランド輸出能力が途上国には皆無に等しい。途上国の対ポーランド輸出の主力は、その85%を占める植物性・動物性原料・食品であり、この部門がⅠとⅤの赤字をバランスする役割をはたしている。これらのことは、現代の世界経済の中において社会主義諸国と比較しても開発途上国が経済発展水準の点で後進的であること、社会主義国間とは異なる国際分業関係にポーランドと途上国との関係はあること、を意味している。

途上国をめぐるこれらの特徴は、対資本主義国貿易の構造が異なった二層によって構成されていることを明示しているだろう。そこで途上国が分析対象から分離されるならば、先進資本主義国の先進的性格が更に際立つようになるわけである。これが第2の特徴である。すなわち、部門別構成比の点から、Ⅳの輸入40%にたいする輸出の60%、Ⅰの輸入21%にたいする輸出の僅か3%；収支の面からは、Ⅳの6億4900万ズロチとⅤの1億6600万ズロチの黒字幅によって可能となる、Ⅰの3億6000万ズロチとⅢの1億4700万ズロチの赤字のうちに、それがあらわれている。ところで、この第2の特徴は次のような2つの側面をもっている。

ポーランドに近隣する、先進7ヶ国以外の西ヨーロッパ諸国——その中心はフィンランド、オーストリア、ベルギー、オランダ、ノルウェー、デンマークである——にたいしては、部門構成比、収支の点からほぼ均衡のとれた貿易構造を有している。原燃料（Ⅱ）、消費物資（Ⅴ）の出超に基づいて、機械・設備（Ⅰ）と農産物・食品（Ⅳ）の輸入をおこなっており、この構造の中でⅡの

原燃料は収入上の釣合いをもたらし重要な部門となっている。ポーランドからのⅠの輸出が少ないこと(3%)に象徴されている工業化水準の負の格差を前提としながらも、水平的な国際分業に接近したものになっている、と判断されよう(第1の側面)。

ところがこの側面にたいして、先進7ヶ国との貿易構成は奇形的で、ポーランドの後進性を鋭角的に示している。すなわち、Ⅰ、Ⅱ、Ⅲの一方的な入超(5億400万ズロチ)は、Ⅳの圧倒的な出超(7億6500万ズロチ)に対応し、その上にⅣの輸出が対先進7ヶ国輸出の4分の3の比重を独占していることにそれはあらわれている(第2の側面)。

しかも奇妙なことに、私達は、先進7ヶ国のⅠの出超幅が途上国のその入超幅に合致しており、途上国のⅣの出超幅は先進国のその入超幅に対応しているという関係があることを読みとることができる。ところがこの対応関係は、すでにみたように、対途上国のⅠの出超分を途上国がⅣで埋め合わせ、バランスをとっており、それとはちょうど逆に、先進7ヶ国にたいするⅠの入超分のうちⅤの出超ではバランスしえない入超分を、Ⅳの輸出超過の方向で調整しているという関係と重なりあっている。つまり、機械・設備の対先進7ヶ国と対途上国の輸出入関係は逆転され、拡大された形で植物性・動物性食料・食品のそれらの輸出入関係のうちに再現されているわけである。

さて、次にポーランドの対社会主義国貿易の部門別・国・地域別構造の特徴を析出することに入る。それを表わした第7表を検討するならば、次のような特徴が析出されよう⁶⁾。

第1に、CMEA 6ヶ国以外の社会主義諸国——その主力はユーゴスラビアである——との貿易は8%で、その比重が低い。しかも第2表でもあきらかなように、他の社会主義国との貿易は取引総額比率の中でも70年に至るまで減少傾向にある。このことは、社会主義陣営の政治的対立の激化並びにユーゴの

6) 以下で述べるCMEA加盟国とはルーマニア、ブルガリア、ハンガリー、チェコスロバキア、東独、ソ連をさす。

CMEA との協力関係の回復，地理的近接と符合する関係にある⁷⁾。

第7表 対社会主義国貿易の部門別・地域・国別輸出入構成

（単位 百万ズロチ）

			ルーマニア %		ブルガリア %		ハンガリー %		チェコスロバキア %	
I	機械及び設備	Im	94	53	18	13	134	38	432	49
		Ex	48	38	96	67	99	35	251	39
II	燃料・鉱物原料・金属	Im	54	30	16	12	88	25	291	33
		Ex	45	36	30	21	131	46	272	43
III	化学製品・肥料・ゴム建設資材	Im	5	3	0	0	13	4	42	5
		Ex	3	2	4	3	13	5	42	7
IV	植物性・動物性原料及び食品	Im	16	9	96	70	29	8	33	4
		Ex	19	15	2	1	16	6	50	8
V	消費物資	Im	9	5	8	6	87	25	75	9
		Ex	11	9	12	8	24	8	24	4
VI	総計	Im	178	(3)	138	(3)	351	(7)	873	(17)
		Ex	126	(3)	144	(3)	283	(6)	639	(14)
東独 %			ソ連 %		CMEA 6ヶ国 %		他の社会主義国 %		社会主義合計 %	
523	—405	52	396	17	1596	34	48	11	1643	32
118		23	1052	43	1664	40	150	46	1813	40
102	206	10	1105	50	1657	35	121	28	1778	34
308		60	652	27	1438	35	89	27	1527	34
169	—163	17	75	3	304	6	27	6	331	6
6		1	97	4	164	4	29	9	193	4
43	4	4	527	24	744	16	155	36	898	17
47		9	143	6	278	7	12	4	290	7
162	—128	16	122	5	463	10	83	19	547	11
34		7	507	21	613	15	44	14	658	15
999	—486	(20)	2225	(42)	4764	(92)	434	(8)	5197	100
513		(12)	2451	(55)	4157	(93)	324	(7)	4481	100

（ ）の内の比率は地域・国別構成比を示す。なお他の比率は部門別の構成比である。
出所 第5表に同じ。

7) ユーゴスラビアとの関係は L. S. ADAMOVIĆ, *Participation of a Self-managed Socialist Economy in International Economic Relations*, *Socialism in Yugoslav Theory and Practice*, No. 12. 1979.

これらの国との貿易の特徴は、Ⅰの出超とⅣの入超の対応関係からすれば、対途上国型に近似している。しかしながら、絶対額は僅かではあるが、部門別輸出入構成比からすれば、Ⅰの輸入が11%、Ⅴのそれが19%あることから、対工業国型に接近する萌芽を内包している、と言える。

第2に、CMEA加盟6ヶ国全体を仕向地とする貿易構造の特徴は、CMEA加盟国での社会主義工業化と並行した機械・設備並びに重工業用原燃料の相互貿易型である、とまとめられる。この点を国別・部門別にみてみよう。Ⅰ部門の機械と設備に関しては、輸出入比がアンバランスでしかもポーランドの収支がプラスなのはブルガリア(7800万ズロチ)とソ連(6億5600万ズロチ)であり、他はいずれも輸出入構成比が釣り合っており入超(東独の4億500万ズロチからハンガリーの3500万ズロチまで)である。ここでは、ソ連の機械・設備輸入国としての位置及び東独、チェコへの輸出力の不足、ルーマニアの輸出超過(4600万ズロチ)がCMEA域内分業の在り方を示すものとして留意されよう。Ⅱでは、ソ連からの輸入構成比の高さとソ連以外の5ヶ国への輸出構成比の高さ、東独への出超(2億600万ズロチ)とソ連からの入超(4億5300万ズロチ)が注目されるが、それは工業用原燃料をソ連から輸入しながら同時に他のコメコン諸国にそれを輸出しているという、資源国ポーランドの特殊な位置を反映している。Ⅲは東独(1億6300万ズロチ入超)以外、すべての国にたいして輸出入構成比が低く、コメコンでのこの分野の立遅れを如実に物語っている。Ⅳでは、ブルガリア、ソ連からの輸入の構成比の高さ、その超過分の大きさが注目される。特にブルガリアにたいする輸入構成比70%、入超額9400万ズロチを同国へのⅠの輸出構成比67%、出超額7800万ズロチとともに考慮するならば、両国のあいだには一方的な工業製品の輸出と一方的な農産物の輸入という貿易関係を固化せしめる余地が残っている、と言える。Ⅴに関しては、若干の振幅はあるにせよ、ほぼⅠと同様な収支および構成比の対応関係をなしており、東独からの入超(1億2800万ズロチ)とソ連への出超(3億8500万ズロチ)が際立っている。

次に国別の部門構成を概観しておこう。ルーマニアは各部門の輸出入比がほぼ釣り合っているが、その中でⅠとⅡの輸入が53%、30%もあるのが特徴的である。コメコン域内で後進的であるルーマニアのかかる特徴は、コメコンの社会主義国際分業の基本原則にたいして消極的態度を表明せざるをえない要因のひとつになっている、と思われる。さて、ブルガリアは前述の通りで、9800万ズロチ、70%を占めるⅣの輸入が全体の収支尻をあわせる機能を担っている。ⅠとⅡの構成比が高いハンガリーと東ドイツではかかる調整機能をⅡの輸出が有している。またチェコスロバキアはⅠとⅡの輸出と輸入の構成比が80%という高率を示している。ここで特徴的なことは、Ⅰの構成比の高さが相手国の経済発展水準の序列に対応していることである。以上が第2の特徴の内容である。

この内容に関連して、特記すべき第3の特徴はソ連邦の別格の地位であろう。国別輸出入占有率をみると、ブルガリア——3%（Im, Ex）、ルーマニア——3%（Im, Ex）、ハンガリー——7%（Im）6%（Ex）、チェコ——17%（Im）14%（Ex）、東独——20%（Im）12%（Ex）であるのに比べて、ソ連からの輸入は42%、輸出は55%で圧倒的な比重を占めている。このことは、ポーランドの貿易構造の特徴づけにあってはソ連を独自にとり出して検討する必要があることを意味している。表からは、ポーランド工業の輸出力がソ連の巨大な国内市場の上に成立しており（ⅠとⅤの占有率64%）、ソ連の豊富な資源のおかげで農産物、第一次産品の大量の輸入（ⅡとⅣの占有率70%）が実現していること、しかもⅡとⅣの両部門で収支のバランスがとられているのだが、全体の出超（2億2600万ズロチ）でポーランド貿易に正の影響を与えていること、が明らかである。

第4の特徴は、上記の第2、第3の特徴を整理することによって析出されるセフ域内分業である。CMEA域内貿易は次のような全く異質の2つの型の国際分業からなる構造としてまとめられよう。第1の型は、ポーランドがソ連からⅡを輸入して、それと交換にⅠ、Ⅴをソ連に輸出する、ソ連の側からすれば、Ⅱを輸出してポーランドの工業化を保障し、その見返りにⅠとⅤを輸入すると

いう、ソ連を中核に放射状に組織された国際分業である。これにたいして、各国のIの輸出と輸入の高い構成比に象徴されるように加盟国の工業化、特に機械・設備部門＝生産財生産部門の発展に際して、この部門で水平的に組織、発展させられている部門内国際分業が第2の型として浮かびあがってくる。ここでの2つの国際分業の特徴は資本主義における国際分業とは性格を異にするものであり、相互に緊密さを増大させつつ工業化を行ないながら、その過程で国際分業を前進させていく方向性は社会主義的な性格のものである、と言える。

最後に、この節でポーランド貿易を部門別・体制・地域・国別に検討してきたことから浮かびあがってくるポーランドの貿易構造を提示すれば、次のような2環節・4小環節からなる基本構造として定式化されよう。

〔第1環節〕 対社会主義国の機械・設備および原燃料、農作物の輸出入＝主要環節

〈第1小環節〉 対ソ連邦への機械・設備と工業消費財の輸出と原燃料・農産物の輸入

〈第2小環節〉 ソ連以外のコメコン加盟国等との機械・設備の相互貿易（入超）および原燃料の輸出

〔第2環節〕 対資本主義国との農産物貿易とそれにもとづく機械・設備等の輸入

〈第3小環節〉 対先進国への農産物の輸出とそれにもとづく機械・設備等の一方的輸入

〈第4小環節〉 途上国からの農産物の輸入とそれに対応する機械・設備、工業消費財の片肺の輸出

III ポーランドの燃料・鉱物原料・金属部門の貿易構造

この節での課題は、ポーランドの貿易構造全体の中での燃料・鉱物・金属部門の細目とその役割を解明しようとするものである。すでに第II節での検討の過程で、1)貿易収支の面からすれば、ポーランドは燃料・鉱物・金属の輸入国

であるが、2) CMEA 域内では、ソ連からこれらの資源を輸入しながら同時に、それ以外の加盟国には輸出しているという二側面をもっており、3) 対資本主義国貿易では輸出超過となっているが、そのうち他の西欧諸国との貿易ではこの部門が収支バランスを釣合わせる調整弁の機能をはたしていること、を指摘した。

これら 3 点を踏まえて、II 部門を構成する各部分の検討に入っていこう。第 8 表は燃料・エネルギーだけを摘出したものであり、それによると、次の点が

第 8 表 燃料・エネルギーの輸出入構成

(単位 百万ズロチ)

	資本主義	先	進	他	の	途	上	国	社会主義	累	計
	国	7	ヶ	国	西	欧	諸	国	国		
石 炭	0 327	0 49	49	0 264	264	0 14	14	113 999	887	113 1,326	1,213
原 油	0 0	0 0	0	0 0	0	0 0	0	245 0	-245	245 0	-245
石 油 製 品	8 49	6 20	14	2 29	27	0 0	0	296 5	-291	304 54	-250
可燃性ガス及び 電力等	0 0	0 0	0	0 0	0	0 0	0	24 31	7	24 31	7
合 計	8 376	6 69	63	2 293	291	0 14	14	678 1,035	357	686 1,411	752
C M E A	ブルガリア	ルーマニア	ハンガリー	チ	ェ	コ	東	独	ソ	連	
113 852	0 4	0 15	15	0 104	104	0 99	99	54 274	220	61 470	409
965	4 4	15 15	104	104	99 99	274 220	470 409	0 245	-245	0 -245	
245 -245	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	179 179	-179	0 -179	
0 -245	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	20 20	-20	0 -20	
288 -287	1 -1	45 -45	21 -21	16 -16	27 -26	179 -179	0 -179	2 2	1	0 -20	
1 -287	0 -1	0 -45	0 -21	0 -16	1 -26	179 -179	0 -179	2 2	1	0 -20	
24 6	0 0	0 2	0 0	1 23	2 1	20 20	-20	3 3	1	0 -20	
30 6	0 0	2 2	0 0	24 23	3 1	0 -20		3 3	1	0 -20	
670 326	1 3	45 -38	21 83	17 106	83 195	505 -35		83 195	505 -35	470 -35	
996	4 3	17 -38	104 83	123 106	278 195	470 -35		278 195	470 -35	470 -35	

上段は輸入、下段は輸出、右の数値はその収支を表わす。
出所 第 5 表に同じ。

特徴としてあげられる。

第1に、この部門は燃料・鉱物・金属の輸入総額の30%、同輸出総額の67%を占め、II部門貿易、とりわけその輸出で圧倒的な比重を有している。このように輸入比率を倍も上回る比重を燃料・エネルギー輸出がもっていることは、この小部門の貿易収支の大幅黒字のうちに反映しており、ポーランドは燃料では輸出国であることを示している。

ところで、ここで注目すべき点は、この黒字を形成しているのは石炭であり、その輸出が対 CMEA 加盟国と他の西欧諸国の出超のほとんどを生みだしていることである。1965年の石炭産出高は1億1880万トンで、そのうち2100万トンが輸出されているので、輸出用は全体の18%であるにすぎない。

これにたいして、輸入では、現代の重要なエネルギー資源である石油（原油と石油製品）はその輸入額が石炭の輸出額の40%であり、1965年時点では石炭による輸出超過を食い潰すまでには至っていない。

次に、表の地域別・国別構成からみると、ポーランドは燃料（主として石油）の98%を CMEA 域内から輸入しているが、同時に、その輸出の70%を CMEA 加盟国向けとしている。特徴の第2はこのような燃料・エネルギーのセフ域内自給率の高さである。ところで、残りの30%にあたる資本主義国向輸出（輸入は皆無に等しい）では、他の西欧諸国向け輸出がその大半の部分を占め、ポーランドの出超を計上しているが、その黒字額は CMEA 加盟国との燃料貿易によるそれとほぼ同額である。このことは、対資本主義国の貿易収支を改善・調整する機能を資本主義国に輸出される石炭が実は担っていることを示唆している。

この第2の特徴に関連して、ソ連への燃料・エネルギー依存度のきわめて高いことが、第3の特徴として指摘されるだろう。地域別・国別構成によれば、この小部門の貿易収支バランスで入超なのはルーマニアとソ連だけである。そのうち、原油と石油製品の輸入はソ連に集中しており、その輸入額は5億500万ズロチで、全体の74%を占めている。このことから、COMECON域内における

燃料・エネルギー自給はソ連への依存に基づいていることが明らかであろう。

次に鉄鉱石および鉄鋼製品の輸出入構成だけを取りだして概観してみよう。第9表はそれをあらわしたものであるが、ここから析出される特徴は以下の通りである。

第9表 鉄鉱石・鉄鋼製品の輸出入構成

(単位 百万ズロチ)

	資本主義 国	先 進 国	他 の 西 欧 諸 国	途 上 国	社会主義 国	果 計
鉄鉱石及び屑鉄 等	69 0 - 69	2 0 - 2	43 0 - 43	24 0 - 24	304 0 - 304	373 0 - 373
鉄鉄及び铸铁	33 2 - 31	0 0	33 2 - 31	0 0	150 11 - 138	183 13 - 170
軌条・鋼材・鋼板 等	64 102 38	26 29 3	24 36 8	15 37 22	299 287 - 12	363 390 27
各 種 鋼 管	46 19 - 27	37 7 - 30	9 9 0	0 3 3	20 47 27	66 66 0
鋼線・その他	37 21 - 16	20 9 - 11	17 3 - 14	0 10 10	15 6 - 9	52 25 - 27
合 計	279 144 - 135	85 45 - 40	126 50 - 76	36 50 14	788 351 - 437	1037 494 - 543
C M E A	ブルガリア	ルーマニア	ハンガリー	チエコ	東 独	ソ 連
304 0 - 304	0 0	0 0	0 0	1 0 - 1	0 0	304 0 - 304
140 11 - 129	0 0	0 0	0 2 2	2 4 2	45 5 - 40	94 0 - 94
283 242 - 41	0 21 21	6 26 20	21 17 - 4	186 96 - 90	10 15 5	63 67 4
19 44 25	0 1 1	1 0 - 1	2 1 - 1	11 8 - 3	2 9 7	3 26 23
15 6 - 9	0 3 3	0 0	4 0 - 4	6 2 - 4	3 1 - 2	2 0 - 2
761 303 - 458	0 25 25	7 26 19	27 20 - 7	206 110 - 96	60 30 - 30	466 93 - 373

上段は輸入、下段は輸出を示し、右の数値はその収支を表わす。

出所 第5表に同じ。

第1に、鉄鋼関連の輸入はⅡ部門全体の輸入の45%、その輸出の23%を保持している。燃料・エネルギーとは逆に、輸入比率が輸出比率の倍大で、輸入国としての性格を色濃くもっている。ところで、ここでの入超は鉄鉱石をはじめ各分野に及んで、5億4300万ズロチの赤字額を出しているが、しかし、軌条・鋼材・鋼板等だけは例外で、2700万ズロチの黒字を計上している。

第2に、地域別構成では、コメコン加盟国との貿易が中心で、輸入の73%、輸出の61%を域内貿易に依っている。ここで留意されるべき点は、そのなかでのソ連の別格な地位であり、ソ連がポーランドへの鉄鉱石等の独占的な供給国であることは、石油の場合と同様である。

しかしながら、セフ域内貿易の比重が高いなかにあって、対資本主義国貿易が輸出入ともに30%弱の比重を占めていることも見逃しえない事実である。輸出では、軌条・鋼材・鋼板を主として途上国に輸出超過しているが、輸入では

第10表 非鉄鉱石・金属の輸出入構成

(単位 百万ズロチ)

品 目	資本主義 国	先 進 国	他 の 西 欧 諸 国	途 上 国	社会主義 国	累 計
非 鉄 鉱 石	72 — 64 8	54 — 46 8	9 — 9 0	9 — 9 0	115 — 115 0	187 — 179 8
非 鉄 金 属	128 — 100 28	90 — 82 8	28 84 112	10 — 2 8	93 — 3 90	222 — 104 118
合 計	200 — 164 30	144 — 128 16	37 75 112	19 — 11 8	208 — 118 90	409 — 283 126
C M E A	ブルガリア	ルーマニア	ハンガリー	チ ェ コ	東 独	ソ 連
82 — 82	0	2 — 2	34 — 34	0	0	47 — 47
0	0	0	0	0	0	0
80 10	15 — 15	0	6 0	6 12	1 15	53 9
90	0	0	6	18	16	64
162 — 72	15 — 15	2 — 2	40 — 34	6 12	1 15	100 — 36
90	0	0	6	18	16	64

上段は輸入、下段は輸出を示し、右の数値はその収支を表わす。

出所 第5表に同じ。

各種鋼管、鋼線・その他の鉄鋼製品を先進7ヶ国から輸入超過している。しかも輸入されている各種鋼管や鋼線では、先進国からの輸入額が CMEA 諸国からのそれを凌駕しているのである。

最後に、非鉄鉱石・金属の輸出入構成を第10表で検討しよう。表によれば次の点が明らかである。

第1に、非鉄鉱石・金属はその貿易取引高がⅡ部門全体の12%で少なく、その割には入超額（2億8300万ズロチ）の大きいことが特徴である。これは重要な輸出品目が亜鉛・亜鉛圧延品にすぎないのにならして、銅・銅線、亜銅製鉄、マンガン鉄、錫、酸化アルミニウム、非鉄金属圧延品（亜鉛圧延品を除く）、クロム鉄、鉛、水銀、銅精鉄（1000万ズロチ以上）などを輸入に依存していることに起因している。

第2の特徴は、先の二部門とは異なり、輸入の地域別構成における分散性である。それは、非鉄鉄・金属の世界的な賦存分布の状況とも関連しているけれども、その中でソ連がポーランドへの主要な輸出国であることには変わりはない。ソ連からの輸入はこの部門の輸入額の4分の1、1億ズロチを占めている。そしてこれに続いて、先進国と CMEA 以外の社会主義国からの輸入額の大きいことが注目される。

以上、燃料・鉄物原料・金属部門を構成する主要な部分をそれぞれ分析してきたが、そこから浮かびあがってくる特徴を要約しておこう。

第1に。この部門の輸出入関係は、多分に燃料、資源の分布状況による自然的分業を基礎に、CMEA 各国の自立的工業化に伴なって形成されたものである、と思われる。例えば、ここの3部門のうち最も詳細な品目別表示がされているのは鉄鉄石・鉄鋼製品であるが、その品目別の検討からは特徴ある専門化と国際分業の展開は検出されていない。そこでは鉄鉄・鉄鉄で相互輸出入関係がみられるだけであり、明らかなことは鉄鉄石、鉄鉄・鉄鉄の貿易が工業化にともなう素材補填的な性格をもっていることである。この性格は燃料や非鉄鉄・金属でも同じである。

第2に。ポーランドはⅡ部門のなかで特に燃料・エネルギー、鉄鉱石・鉄鋼製品を主として CMEA 域内からの自給に依存している。そしてこのような自給率の高いなかで、ソ連は唯一の資源供給国として位置している。このことは CMEA が資本主義世界経済に対抗して、国際的な地域経済統合体を形成しており、その中核にソ連がいることを明らかにしている。

第3に。ポーランドは全体的評価として資源輸入国として性格づけがあたえられるなかにあつて、石炭は輸出国としての側面をもっており、先進国にたいする主力輸出品目のひとつとして、また非鉄鉱・金属と他部門の品目の輸入を可能にするものとして、機能している。しかしながら、それは貿易構造全体の中で貿易収支を最終的に調整する役割を十分はたすまでには至っていない。

(脱稿 1980・10・9)